

問題【国語】

次の文章は説話「絵仏師良秀」の一部で、仏様の絵を描く職人だった良秀が自分の家が燃えているのを見て、笑っている理由を述べている場面です。後の問いに答えましょう。

年ごろ、不動尊の火災をあしく書きけるなり。今見れば、かうこそ燃えけれと、心得つるなり。これこそ所得よ。この道を立てて世にあらむには、仏だによく書きたてまつらば、百千の家もいできなん。

注 年ごろ：長年 あしく：悪く かうこそ：このように 心得：理解

問「これこそ所得(=儲けもの)よ」とあるが、何が儲けものなのか説明しなさい。

豆知識

雑学コラム

古典から得る教訓

さて、今回は古文の説話「絵仏師良秀」から問題を出しました。「絵仏師良秀」は芥川龍之介の「地獄変」の題材となった話としても有名です。説話とは、あるエピソードをもとに教訓を伝える話です。「絵仏師良秀」では良秀が、燃える自分の家を見て笑っています。一見すると、家の火事に混乱して正気を失ったようにしか思えない状況ですが、このエピソードにはどんな教訓があるのか考えてみましょう。

良秀のセリフを現代語訳すると「長い間、不動尊の絵の炎を下手に描いていたものだった。今、家の炎を見ると、こんな風に燃えるのだと心得た。これが儲けものよ。仏様の絵を描く職で世の中を生きていくなれば、仏様さえうまく描き申し上げれば、100軒でも1000軒でも家を建てられる」という内容です。つまり、長年、描くのを苦手としていた不動尊の絵の炎を、どのように描けばよいのかを理解したことをうれしく感じて笑っていたということになります。

みなさんはこれを読んでどんな教訓を感じたでしょうか。自分の家が燃えているのに、それを見て笑ってられるなんて、良秀は常人ではないと片づけることはできないですね。家の火事は大きな困難です。そういう場面で、その困難を逆手にとって、自分のこれからの糧にしていく姿勢と、困難でもこの先に生かせるものを得られたことへの喜びがこの説話の中の教訓ではないでしょうか。実際、この話では最後に「そののちにや、良秀がよぢり不動とて、今に人々愛で合へり（その後、良秀の描いた不動尊は『良秀のよぢり不動』と呼ばれ、人々に今も親しまれている）」と書かれていて、良秀がこの火事から得た炎の描き方を糧にして生きていったことがわかります。人はどんなときでも困難に直面することがあります。現代に生きる私たちは、良秀のように困難に直面した時、そこからこの先に生かせる何かを学ぼうとする姿勢に臨み、困難から学びを得られたことに喜びを感じることができているでしょうか。こうした古典から得た教訓を胸にしまっておきたいものですね。

【解答】

そこ

ふくむ証をいひつらばいひ掛にそすのそ、そ

のそ、尊のそ、いひつらばいひ掛にそすのそ、そ

(例)